毎年8月に開かれる“チルミュ”で名画を鑑賞する子供たち。
館内いっぱいに歓声が響き渡る

走り続ける老舗美術館

時代を生きる、地域と生きる

山陽新聞編集局
文化部記者 岡田 智美

Tomomi Okada

岡山大学文学部哲学科（美学・美術史専攻）卒。1994年山陽新聞社入社。文化部、社会部、整理部などを経て2007年から再び文化部で美術などを担当している。

「〝老舗美術館〟は、最も旬の現代アートに出会える場」

年明け早々、取材に訪れた大原美術館（岡山県倉敷市中央）は、いつもと少し趣が異なっていた。

壮麗なギリシャ風の本館エントランスをくぐった先のアトリウムで、出迎えてくれたのはピンクのウーパールーパーの張り子が飾られたひな壇。世界的名画エル・グレコ「受胎告知」の向かいにも、厳かにウーパールーパーが描かれた油彩画が掲げられている。

なんだこれ？　とキッチュなおもちゃみたいなオブジェをいぶかしそうに眺める人、妙に愛嬌（あいきょう）のある表情に笑ってしまう人。入館者の反応にうなずきながら、「面白いでしょ」と学芸課長の柳沢秀行さん（45）が現れた。

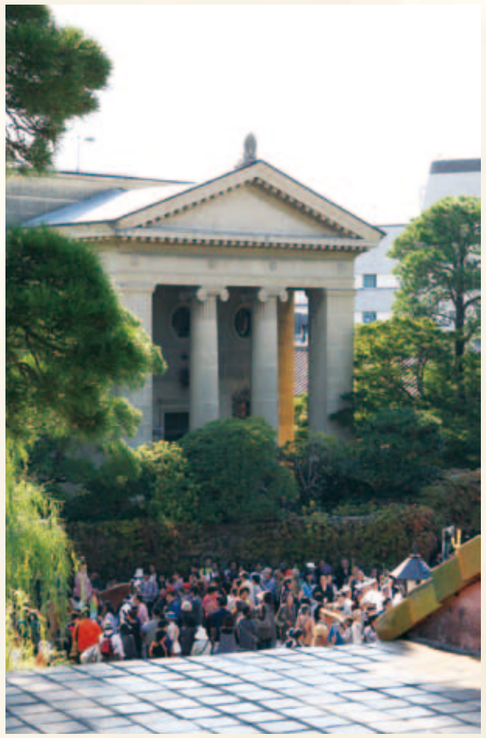
これらは元日に開幕した現代美術のシリーズ展「AM倉敷」（4月8日まで）の展示作品。AMとはArtist Meetsの略。今回はウーパールーパーに自画像を重ねる新進画家松井えり菜さん（28）＝倉敷市出身＝が、幼いころから親しんだ美術館の名画を自画像に取り込んだりした作品を館内に展開するという趣向だ。

モネ、ゴーギャン、ピカソ…。美術ファンならずとも知る巨匠の名画がずらり並ぶ大原美術館は1930年の開館。わが国初の西洋近代美術館として知られる〝老舗〟は、最も旬の現代アートに出合える場として、いまもトップスピードで走り続けている。

「常に〝成長〟し続ける美術館を目指して」

特にこの10年の進化はめざましい。館長に美術界の重鎮・高階秀爾氏を迎えた2002年から、新たに加わった柳沢さんらスタッフとともに、大原家旧別邸・有隣荘を使った現代美術展、若手作家に滞在制作してもらうアーティス

中庭の池では、フランスのモネの庭から株分けされたスイレンが毎夏かれんな花を咲かせる



ギリシャ神殿風の建物がひときわ目を引く大原美術館

ト・イン・レジデンス事業（通称ARKO）など、新規事業を次々立ち上げる。

これまでにかかわったアーティストは、杉本博司さん、ヤノベケンジさん、やなぎみわさんら、アート界の一線で活躍する顔触ればかり。ただ現場で指揮を執る柳沢さんにいわせると「これまでしてきたこと、いわゆる美術館の使命をブラッシュアップしているだけ」という。

もともと美術館のコレクションは、実業家大原孫三郎の支援でヨーロッパ留学した洋画家児島虎次郎が、本場の絵画を日本人に紹介しようという志の下に集めたもの。孫三郎が児島の遺志をくんで創設した美術館は、2代目總一郎に引き継がれた際、〈美術館は単なる陳列場ではなく、常に生きて成長していなければならない〉と戦後の新しい美術を収集したように、常に時代とともにあった。

そして現在の大原謙一郎理事長は「第3創業期」と位置づけ、〝成長〟にさらに磨きをかける。目指すのは倉敷の地にあって、21世紀に必要とされる美術館、だ。

「〝チルミュ〟がつむぐ子供たちと地域のつながり」

「結局ね、美術館は地域社会の装置としてどう機能するかってことなんですよね」

美術館の理想をたずねると、柳沢さんはかつての自身の体験談を教えてくれた。

岡山県立美術館の学芸員だったころ、優れた絵画を集めた展覧会に入場者が集まらず、ショックを受けた。そのとき気付いた。いい展覧会をしているからと殿堂然と人を待っていてもだめで、美術に触れる楽しさを伝えていくことも美術館の仕事だと。

だから大原美術館に職場を移した年、「チルドレンズ・アート・ミュージアム（通称チルミュ）」を立ち上げた。夏休み最後の週末、全館を使って繰り広げる子供向け体験プログラム。参加した子どもたちは中庭の彫刻広場ではだしになってダンスをしたり、クイズをしながら展示室をめぐったり。さながら遊園地のにぎやかさに包まれる夏の名物行事だ。

その取り組みは「気の長い、社会実験のようなもの」ともいう。例えば1993年から行っている未就学児対象プログラムは、市内約25の保育園・幼稚園を毎年受け入れ続けている。最初に受けた子はもう20代になる。

何を描いているのか分からない抽象絵画、へんてこなオブジェ、遠く離れたオリエントのつぼなど、美術館の作品を通じて多様な美の価値観を知った子は、未知のものに出合ってもきっと、心を開くことができる。美術家にならずとも、イマジネーション豊かな社会人になってくれるはずだ。

「人にちゃんと寄り添える公務員、独創的な料理人とか。そんな大人が増えれば、倉敷のまちがもっと面白くなると思いませんか？」

つまり、地域力の底上げ。人が育ち、まちが活気づけば「美術館があって良かった」とその価値も広く認識されていく。

「美術館は豊かな出会いの場でありたい」

話にひと区切りがついたころ、展示室に園児たちが手をつないで入ってきた。未就学児対象プログラムを受ける子供たちだ。

「わあっ、ウーパーだ」

松井さんの作品に、歓声が上がった。早速、柳沢さんは会場にいた松井さんを手招きして、子どもたちに紹介する。

「このお姉さんが描いたんだよ。みんなのように小さいころから、お姉さんもこの美術館でたくさん絵を見ていたんだよ」

好奇心いっぱいの瞳が一斉に松井さんをとらえた。恐らく、人生で初めてのアーティストとの出会い。きらきらした瞳に見つめられ、照れくさそうに笑う松井さん。天窓から柔らかな冬日が差し込むある日の温かなひととき――。

地域に人がいて文化は生まれ、はぐくまれる。人と作品とアーティストと。美術館はいつも豊かな出会いの場でありたいと柳沢さんはいう。そして地方紙もまた、そんな出会いが生む物語を現場で見つめ、伝えていける存在でありたいと思う。

展覧会場で松井えり菜さんと談笑する柳沢秀行学芸課長。若い作家に発表の場を与えるのも美術館の役割だ

江戸時代の風情を残す美観地区。美術館と町をつなぐ今橋の竜模様は、児島虎次郎が辰年生まれの大原孫三郎にちなんでデザインした

倉敷・美観地区の町家や商家が自慢の屏風を並べる秋の「倉敷屏風祭」。美術館向かいの国重文・大原邸にも逸品が飾られ、周辺は祭りムードに染まる